

<調査報告>

沖縄県の仏教寺院の活動状況（Ⅱ） —八正道を通して活動を概観する—

松 浦 光 和

はじめに

（1）仏教伝来の歴史

沖縄への仏教伝来について名幸（1968）は以下の様に説明している。

仏教が伝来したのは英祖王（在位 1260 年-1299 年）の時代で禅鑑と称する僧侶が那覇に漂着して浦添城の西に極楽寺を建立した。禅鑑は宋の僧侶と言われている。薩摩では 1246 年、臨済宗の宋の僧侶・欄溪道隆和尚が道隆寺を開山と伝えられるが、この禅鑑も宋の人だとすれば、これが中国から沖縄への初めての仏教伝来になる。

ただし尚泰久王（在位 1454 年-1460 年）には朝鮮から多くの蔵経や漢籍書が送られているので朝鮮僧が沖縄に来た可能性があり、禅鑑は朝鮮僧だとも考えられる。

日本との交通については、孝謙天皇の天平勝宝 5 年（753 年）、遣唐使の船が中国からの帰途に、その一部が沖縄に漂着した記録があり、その船には鑑真和上や東大寺の普照和尚が乗っていたので、この時代すでに中国僧と日本僧が沖縄を知っていたことになる。また、延暦 23 年（804 年）には真言宗の開祖・弘法大師（空海）が中国留学からの帰路、沖縄に接近した記録があり、仁寿 3 年（853 年）には天台宗の智證大師が中国からの帰りに沖縄を漂流しているが、沖縄は日本に知られていたろうから日本僧が布教にくることは当然あり得たろうとしている。

察度王（在位 1350 年-1394 年）の時代に薩摩の坊津から来たと考えられる頼重法印が波上護国寺を開いて察度王の祈願時としたが、頼重法印は日本に帰ることはなく護国寺で入滅したので、漂流して偶然に来たのではなく初めから布教が目的で沖縄にきたのであり、これが初期の真言宗の伝来として考えられる。

尚芭志王（在位：1422 年-1439 年）の時代に大安禅師が建立されたので、これが禅宗の初期の伝来であろうが、これが曹洞宗・臨済宗・黄檗宗のいずれであるかは不明としている。

尚寧王（在位 1589 年-1620 年）の時代に浄土宗の袋中上人が沖縄で浄土宗の布教を行った。

日蓮宗は明治 11 年に、八重山で商売をしていた片桐信平という人が草庵を結んで布教を始めた。

浄土真宗は明治12年1月に布教が許された。

（2）四諦論八正道の概略

仏教は人間を苦悩から救済するために布教されてきたと考えられる。覚者となった釈尊（仏陀）が鹿野苑でかって一緒に修行した阿若憍陳如ら5人の比丘に施した最初の説法（初転法輪）で説いたとされる仏教の根本教説は四聖諦であるが、朴光駿（2012）は四諦ないし四聖諦について以下の様に説明している。

諦とは真理を意味するもので、四聖諦は四つの聖なる真理のことである。苦聖諦（苦諦）、集聖諦（集諦）、滅聖諦（滅諦）、道聖諦（道諦）の四つであり、それらは人生の問題の本質とその解決方法に関する真理である。四聖諦は次のように説かれている。

第一の苦諦は人生の苦痛に関する真理である。現実世界は苦痛の世界である。人生の苦痛は生老病死の苦痛（四苦）に、愛する人と別れる苦痛（愛別離苦）、憎い人と会わざるを得ない苦痛（怨憎会苦）、求めたことを手に入れられない苦痛（求不得苦）、苦の源である五蘊に執着する苦痛（五種蘊苦、五陰盛苦）など八つの苦痛がある。こうした苦痛は避けことができない。

第二の集諦は、苦痛の原因に関する真理である。生存が苦しくなるのは充足されない欲望、すなわち渴愛と無知・無明があるからである。永遠ではない身体を永遠のものともみなし、その形に執着することに苦痛の原因がある。

第三の滅諦は、苦痛を消滅させることに関する真理である。滅とは渴愛の消滅である。渴愛が完全に消滅した理想的境地が涅槃であり、それは渴愛の束縛から自由になった境地である。渴愛が消滅することで智慧が生まれ、その智慧をもって涅槃に到達することができる。

第四の道諦は、苦痛の消滅を実践する方法に関する真理である。

この道諦について水野弘元（1972）は以下の様に説明している。

道とは理想の涅槃に至るべき原因としての修行方法である。それは八つの部分から成り八正道とされ八つの項目が掲げられている。

たとえば肺病を治療するには、肺をおかしている結核菌だけを除けばよいというものではなく、肺を直接に治療する以外に栄養をつけたり適度の運動や十分な睡眠をとったり心の不安や苦勞をなくし、希望と安心をもたせるようにすれば食欲も増して自然に健康が回復するであろう。いかに薬だけを用いても、心が安静せず身体が元気づけられるのでなければ、薬の効果は十分に現われないであろう。心の病気としての苦悩をいやす場合もこれと同じである。苦の原因は渴愛であるとしても、渴愛の除去だけでは十分でない。心は肉体を含めて、有機的に関係しているから、身心の全面にわたって改善して行かなければ、健全な状態としての涅槃は望まれない。

そして水野は八正道を以下の様に簡単に表示説明している。

- ①正見……正しい見解、信仰
- ②正思惟……正しい意志、決意
- ③正語……正しい言語的行為
- ④正業……正しい身体的行為
- ⑤正命……正しい生活法
- ⑥正精進……正しい努力、勇氣
- ⑦正念……正しい意識、注意
- ⑧正定……正しい精神統一

(3) 松浦のこれまでの調査

松浦（2018）によると、沖縄県の仏教寺院（法人）の数は2015年現在で85寺である。1寺院あたりの県民数は1644人であり全都道府県では最も多い、最も少ないのは滋賀県で1寺院あたり440人であった。

沖縄県の寺院は極めて少ないことが分かり、沖縄県の寺院数の特異性に注目して仏教寺院の活動状況の調査を2017年11月に行った。この時は戦後に建立された2寺院と王朝時代からの4寺院を調査した。

沖縄県は歴史的な経緯によって47都道府県の中では唯一檀家制度を経験していない。信者は自由に寺院を替えることが可能である。この状況にある住職は、資本主義的な自由市場と同じだとしている。この結果、寺院は競合し人々は自分にとって適切な寺院を選択するので、両者によって今後の沖縄県の仏教寺院の活動がより活発化するように考えられた。

I. 目的

今回は仏教の根本的な教理である四諦論に関連する八正道を通して寺院の活動を概観する。四諦論・八正道の概略を資料に記した。

II. 方法

時期 2019年1月17日～19日。

調査対象 沖縄県南部・中部の5寺院すなわち聖現時（那覇市）、大願寺（浦添市）、西来院（那覇市）、真常寺（読谷村）、護国寺（那覇市）。

調査方法 住職にインタビューをした。その際、全て録音することと併せて内容を大学紀要

に投稿する許可を得た。

インタビューの方法 寺院の活動状況について質問した。

インタビューの整理 八正道は涅槃に至るための仏教修行の方法であるが、水野（1972）の説明（Table 1）に沿って、寺院（住職）の活動と八正道の関係を追究した。

Table 1. 水野（1972）による「八正道」の説明

八正道	仏教生活で修行	一般社会での修行
正見	正しい見方であって、仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧である。	日常生活において何か事業をなす場合の全体的な計画や見通しを持つこと。
正思惟	身体による行為を為す前の正しい意志または決意を指す。出家者ならば、出家者にふさわしい柔和や慈悲や清浄の心で思念思惟することである。	一般社会でも、学生や勤め人や事業家など、自分の立場を常に正しく考えて意志を持つこと。
正語	正思惟の後に生ずる正しい言語的行為である。	妄語（いつわり）・悪口・両舌（中傷）・綺語（むだ口）をせず、他を愛し融和させる有益な言語をなすことである。
正業	正思惟の後に生ずる正しい身体的行為である。	殺生（殺し）・偷盗（ぬすみ）・邪淫（不倫行為）を離れ、生命の愛護、施与慈善、性徳を守るなどの善行をなすことである。
正命	正しい生活である。これは正しい職業によって正しく生活することであるが、さらに日々の生活を規則正しいものとするところでもある。	睡眠・食事・業務・運動・休息などについて規則正しい生活を営むことによって、健康は増進し、仕事の能率も上がり、経済生活や家庭生活が健全に遂行されるのである。
正精進	勇気をもって正しく努力することである。	精進とは理想に向かって努力することであって、それは宗教的・倫理的・政治的・経済的・肉体的健康的のあらゆる面で理想としての善を生じ増大させ、これに反する悪を減じ除去させるように努力することを指す。
正念	正しい意識をもち、理想目的を常に忘れないことである。	日常生活でもうっかりほんやりしないことである。些細な不注意がいかにか重大な惨事を引き起こすかは、一般社会に絶えず見られるところである。仏教的な正念とは無常・苦・無我などを常に念頭において忘れないことである。
正定	精神統一のことであって、四禪定のことであるとされる。	四禪定というような正式の禪定は一般人には得られないとしても、日常生活でも心を静め、精神を集中することは、正しい智慧を得たり、それを適切に活用させたりするために必要である。明鏡止水といわれる曇りない心や無念無想といわれる心の状態は正定の進展したものである。

Ⅲ. 結果と考察

ここでは、調査した寺院の歴史（由来）とインタビューの概要と八正道との関係について記述する。

1. 東寺真言宗 天久山 聖現時（せいげんじ）（調査日：2019年1月17日）

（1）歴史（由来）

沖縄県仏教会の資料（1987）によると、天順年間尚泰久王の頃、または1466年頃、或いは尚真王の1492年（弘治五年）の頃の創建と云われ、咄海（とっかい）和尚を開山とし創建時は禅宗に属していた。



写真1 聖現時

1671年（寛文十一年）、波之上護国寺住持頼昌（らいしょう）法師によって大乘三密（真言宗）門流となり聖観世音菩薩を勧請することになる。伝えによれば当寺はもとは奄美大島や鬼界島などからの貢ぎ物を納める公倉であったといわれ、大島倉、泊倉とも呼ばれていた。また尚敬王五年の時に、釈迦・弥陀・薬師如来の三像が真壁間切名城（現糸満市名城）の海岸に漂着したので、これを当寺に奉納したと伝えられている。

1844年（尚育王時代）、王命によりフランス人宣教師ホール・カンシュン（或いはフォルカド）と、中国人伝道師オゴシをこの寺に留め置いた。その後国交が盛んになるにつれ、この寺と護国寺は外国人との応接の公館に当てられた。ペリー提督来航の際にも宿泊所に当てられた。

昭和20年、当寺は沖縄戦によって焼失したが、昭和35年、住職仲尾次覚正師に依り本堂と庫裡を再建し本尊聖観世音菩薩を安置し現在に至る。

また当寺には沖縄戦々没者（ひめゆり部隊）の位牌も安置されている。

(2) インタビューの概要

寺院に来る人々から、法事などではユタに依って行くか、寺院に依って行くか、どちらが良いかを尋ねられる場合がある。先代は寺院を選択するように提言してきたが、現住職は人々の主体性を尊重し、自由に選ぶ様に提言している。

最近、地域のお年寄りとの付き合いが減ってきた。以前は地域の住民と当寺院の付き合いが

あったが、マンションや団地が増えるにつれて、そこに住む人々が、それぞれ別々の寺院との付き合いがあるために、地域との付き合いが少なくなっている。

寺院に来る人々は寺院に法事や位牌のこと、精神的な問題の相談、愚痴を聴いてもらうために来る。病気について尋ねてくる人もいる。治らない人には「他の病院にも行ってみたらどうですか」と言うこともある。祖父の代にお祓いを受けた人が、今でも寺院に来る場合もあり、その方々の依頼で現住職もお祓いをする。

人々がお墓を建てる際に、山の中や海のそばなどで地形的に危険なところもあるので注意するように伝えるが、祖先の霊と絡めては注意しない。

ユタとの関係であるが、特に関係を持ってない。

（3）活動と八正道の関係

先祖供養の方法などについて寺院とユタの方法が異なり信徒が両方から情報を得て迷った場合、現住職は人々の主体性を尊重し自由に選ぶ様に提言している。人々が精神的な問題の相談、愚痴を聴いてもらうために来る場合、住職は相談に乗る様である。これは「出家者にふさわしい柔和や慈悲や清浄の心で思念思惟する」（Table 1）に近く「正思惟」と関係すると考えられる。

また人々がお墓を建てる際に物理的に危ない場所を指摘することはあっても、霊に絡めたりはしない点については「仏教の正しい世界観」（Table 1）に近く「正見」に関係すると考えられる。

2. 真言宗智山派 雄翔山 大願寺（だいがんじ）（調査日：1月18日）

（1）歴史（由来）

現在の住職が初代である。もともとは本土でサラリーマンをしていたが利益追求に悩みを抱える様になり疲れてしまい自分の矛盾・葛藤を解決したくて仏教（真言宗智山派）に救いを求め平成5年（1993）に出家得度、平成24年（2012）に寺院が宗教法人となった。調査した2019年当時、開山後30年程度経ていた。

（2）インタビューの概要

住職はビジネスから離れて仏教の道を選んだので出来るだけ経済的な利益を追求しない生活をしたかった。そこで、納骨堂を持たないで、人々からお布施をいただいて寺院を維持している。沖縄の多くの寺院は納骨堂からも収入を得て寺院と住職の生活を維持しているが、人々からのお布施に依って維持していることは珍しい。

住職の活動は主に人々の精神的な生活を支援することである。特に迷信によって不安に陥っ



写真2 大願寺本堂

たりして寺院に通う人々のために、正しい見方・考え方を伝えるために体系的な仏教の教理を重視している。住職は仏教の教理を背景にしているが、これを人々に強く教えたりはしないで人々が自ら気付くのを待つように務めている。仏教がゆがめられて誤解されている場合もあるので、正しく意味を伝える努力を怠らない。寺院に来る人々（信者）との関わり合いは家族的に付き合い、お互いに語り合い、お互いに慰め合って共に生きようとしている。沖縄独特の風土に合わせて、教理から少し離れて布教する場合もある。人々が自分を顧みることが出来る様に布教を考えている。

ユタとの関係であるが、住職はユタに仏教への理解を求めている。

(3) 活動と八正道の関係

住職は仏教の教理から少々離れることはあっても教理に忠実であろうとしているが、これは「正しい見方であって、仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧である。」(Table 1) と近い。即ち「正見」であろう。また、教理を人々に強く教えたりはしないで、人々が自ら気付くのを待つように務めているが、これは「出家者ならば、出家者にふさわしい柔和や慈悲や清浄の心で思念思惟することである」(Table 1) に近い。すなわち「正思惟」であろう。

住職は、前職を離れて修行して寺院をつくり、集まってくる人々と家族的に付き合い、語り

合い慰め合って共に生きているが、これは「勇気をもって正しく努力することである。精進とは理想に向かって努力すること」（Table 1）と近い。すなわち「正精進」であろう。

3. 臨済宗妙心寺派 達磨峰 西来院（さいらいいん）（調査日：1月18日）

（1）歴史（由来）

沖縄県仏教会の資料（1987）によると、慶長十六年（1611年）球陽国師菊隠宗意禅師によって創建された。

菊隠禅師は、鎌倉、京都五山で修行して大悟徹底する一方、文武両道にもすぐれた、琉球史上著名な高僧である。慶長の役（薩摩の琉球侵攻）の時、王命を受けて国難に関与し、薩摩との和平、日琉両国の親善交流に老骨を捧げ、常に国王の心の支柱となって側近に侍した。僧侶としては別格の、三司官の高席にあって、国政に参画した。

後、勲功により禄を授けて本寺を創建し琉球唯一の国師号を賜った。爾来、法灯連綿、現世十七代に亘る。

本寺は庶民の信仰が厚く古くより首里十二ヶ所霊場の一つで戌亥年生れの祈願所であるが、特に病氣平癒、女体守護、先祖、水子など物故者の供養寺としても、年中参詣者が絶えない。

更に、当山の達磨大師は、福寿開運・不倒の縁起随一で、俗に達磨寺といわれる所以である。



写真3 西来院本堂

(2) インタビューの概要

この寺院には、京都の伏見稲荷大社の様に複数の紅色の鳥居が並んでいる。その先に稲荷大明神が在り神仏混合であり多くの人々が来る。寺院では座禅会や八正道の会を催して布教している。さらに感性で仏教を伝えるために音楽堂を造り、ここでジャズコンサート、落語会、インド舞踊などを開催している。

ユタとの関係については、先代のことが話された。先代の頃は花園会（妙心寺派）にユタを招待し、ユタとディスカッションして禅について学んでもらい、ユタとの関わりが深かった。

(3) 活動と八正道の関係

寺院は神仏混合のスタイルであるが人々が安心出来れば良いと住職は考えている。また感性を通して布教するために音楽堂を建設したことも「出家者にふさわしい柔和や慈悲や清浄の心に思念思惟」(Table 1)に近く「正思惟」であろう。

また、座禅会や八正道の会を催して布教している。これは「仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧」(Table 1)を以て行うのであろうから「正見」に関係するのであろう。

4. 浄土真宗本願寺派 読谷山 真常寺（しんじょうじ）（調査日：1月19日）

(1) 歴史（由来）

先代が1983年に沖縄県読谷村に読谷布教所を開設した後、1990年に真常寺を建立した。現住職は22年前（2019年現在）に赴任した。

(2) インタビューの概要

住職は熊本県の寺院の長男（跡継ぎ）であったが、生家を弟に譲って当寺に赴任した。今は総勢5名（僧侶・事務職）で寺院を運営している。布教のために大学レベルの講義である「真常寺親鸞講座」などを行うが、この講義には本土から講師を招くことが多く、参加している人々は浄土真宗の教義を学問的に追究している。さらに一般的な仏教の教理を伝える「日曜法座」などを実施している。また「文書伝導」として仏教を文書で伝えるために印刷物を作って、地域の人々に毎回2000部くらい配付している。そのテーマは「仏」、「家の基礎」、「此岸から彼岸」、「お盆から学ぶ」など多岐にわたる。

地域の人々が法事の日いち、お供えなどで悩むことがあるので住職は話を聴くようにしている。その時は自宗派のポリシーを守るようにしている。

沖縄は浄土真宗では開教地と考えられていて、これから布教を進めてゆく。地域の方々と繋がっていきたいが、寺院に来る人が自身を檀家と自認して来るのか否かは分からないことが多い



写真4 真常時本堂

く、ここが本土とは違う。

本土の場合は家族全員が同一の寺院の檀家であるが、沖縄では家族が別々に寺院に関係している場合があり、いわばメンバー制の檀家であるが、これからは本土も同じ様になるのではないかと。

地域のユタとは、法要の考え方が違う場合もあるが対立はしないで共存しようとしている。檀家制がなく寺院の自由競争なので、お互いがライバルであり寺院同士は競っている。

（3）活動と八正道の関係

住職は宗派の考えに則って浄土真宗本願寺派の開拓者の様にして赴任し努力したのであろう。これは「勇気をもって正しく努力すること」（Table 1）に近いと考えられ「正精進」であろう。

また専門的な講義と一般的な講義を設けて布教に励んでいる。これは「仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧」（Table 1）を以て行うのであろうから「正見」に関係するのであろう。

5. 高野山真言宗 波上山 護国寺（ごこくじ）（調査日：1月19日）

（1）歴史（由来）

沖縄仏教会の資料（1989）によると、室町時代（1368）に琉球国王察度により勅願寺として創建され、沖縄第二の古刹であり開山は頼重上人である。上人は薩摩の国（鹿児島）の坊之津一乗院（1200年前に建立された真言宗の大寺院であったが明治初年に焼失して現在は無い）から沖縄に真言宗を布教するために来島され、時の国王察度の尊信を得て現在地に護国寺を創建した。現住職は第七十四世である。

この寺は察度王が勅願（国王が天下泰平、鎮護国家、五穀豊熟、万民豊樂を祈願）の道場として以来、王が即位すると家来311人（王の正式行列は311人と定められていた）と共にこの寺に参詣し、本堂に於いて王と家来との間に君臣の縁結びの盃をとり交わした寺として有名であり、このようにして護国寺に参詣した国王は武寧王以下最後の国王尚泰までに二十六人であった。又、王城に於いて毎年1月8日より14日まで、宝祚延長、万民豊樂の祈願法要が行なわれたが、当寺住職以下、末寺の住職20数名が出仕した。

この寺は昭和20年5月27日沖縄戦のために焼失し、昭和23年那覇市開南地区に仮復興し、昭和50年現在地に本格的復興を終った。初詣での寺としても知られている。



写真5 護国寺

（2）インタビューの概要

常に寺院を人々に開放している。また日曜日は法話・写経の会などを開催して布教している。この会には地域外の人々も多く参加する。また寺院の信徒と一緒に四国で遍路修行も行った。

先祖の魂が安泰か心配して寺院に来る人々もいるが、その人の話を聴き仏教的な見地から説教をして苦しみから解放されるように支援することがある。

ユタとの関係であるが、ウグァンプトゥチ¹⁾（御願解き）には人々がユタと一緒に寺院を訪れることがある。寺院はユタとの交流はないが、このようなかたちでの関係はある。

（3）活動と八正道の関係

人々と遍路修行を実践したのは「勇気をもって正しく努力すること」（Table 1）に近いと考えられ「正精進」であろう。また迷信に苦しむ人々を解放するのは「正しい見方であって、仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧」と関係するであろうから「正見」であろう。

IV. まとめ

聞き取った内容を水野（1972）が説明した八正道の解釈に沿って「活動と八正道の関係」を記述し、これを Table 2 に纏め、更に集約して Table 3 に示した。ここから寺院の活動が「正見」、「正思惟」、「正精進」に関わっていることが分かった。「正見」は 5 寺院が関わり、「正思惟」は 3 寺院が関わり、「正精進」は 3 寺院が関わっている。

インタビューでは各住職は日頃の活動の中でも特に力を注いでいる事項を優先的に伝えていたのであろう。またインタビューの時間は 1 時間程度であるから、著者が把握出来た内容は活動のごく一部の限定された内容であるが、寺院活動の一端を知ることが出来た。冒頭に記した様に沖縄県に仏教が伝わったのは 13 世紀頃であるが、1 寺院あたりの県民数は日本では最も少ない。寺院活動を追究する方法は複数あると考えられるが、仏教本来の考え方である「八正道」を通して行ったことは、沖縄の仏教寺院の活動を捉える上では有意味であったと考えている。

Table 2. 寺院の活動内容と該当する八正道と根拠

寺院	活動内容	八正道	根拠
聖現時	人々に自由に選ぶ様に提言し人々の主体性を尊重している	正思惟	出家者にふさわしい柔和や慈悲や清浄の心で思念思惟する
	お墓を建てる際に、山の中や海のそばなどで地形的に危険なところもあるので注意するように伝えるが、祖先の霊と絡めては注意しない	正見	正しい見方であって、仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧
大願寺	仏教の教理から少々離れることはあっても教理に忠実であろうとしている	正見	正しい見方であって、仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧
	教理を人々に強く教えたりはしないで、人々が自ら気付くのを待つように務めている	正思惟	出家者にふさわしい柔和や慈悲や清浄の心で思念思惟する
	前職を離れて修行して寺院をつくり、集まってくる人々と家族的に付き合い、語り合い慰め合って共に生きている	正精進	勇気をもって正しく努力することである。精進とは理想に向かって努力すること
西来院	寺院は神仏混合のスタイルであるが人々が安心出来れば良い	正思惟	出家者にふさわしい柔和や慈悲や清浄の心で思念思惟
	感性を通して布教するために音楽堂を建設した		正見
真常寺	座禅会や八正道の会を催して布教	正見	仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧
	宗派の考えに則って浄土真宗本願寺派の開拓者の様にして赴任し努力したのであろう	正精進	勇気をもって正しく努力することである。精進とは理想に向かって努力すること
護国寺	専門的な講義と一般的な講義を設けて布教	正見	仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧
	説教をして苦しみから解放されるように支援	正見	正しい見方であって、仏教の正しい世界観や人生観としての縁起や四諦に関する智慧
	信徒と一緒に四国で遍路修行	正精進	勇気をもって正しく努力することである。精進とは理想に向かって努力すること

Table 3. 寺院活動と八正道の関係

寺院／八正道	正見	正思惟	正精進
聖現時	○	○	
大願寺	○	○	○
西来院	○	○	
真常寺	○		○
護国寺	○		○

[注]

1) ウグァンプトゥチ（御願解き）：家を守る火の神（ヒヌカン）が1年に1回天国に帰るが、その時に、過去一年間に叶えられた願いごとや幸いなことに感謝し、逆に不幸なことや災厄は解消されるよう祈り、この1年間のもろもろの願を請い下げる御願（御願解ち）いごと。旧暦12月24日に行う。

謝辞

今回の調査に当たり、全ての寺院に調査を依頼して下さり、同行して下さりインタビューも支援して下さいました琉球大学名誉教授の中村完博士に心より御礼申し上げます。

また調査に応じて下さいました寺院ならびにご住職方にも感謝致します。

引用文献

- 沖縄県仏教会（1987）. 沖縄県仏教会加盟寺院案内
名幸芳章（1968）. 沖縄佛教史 護国寺 1-20.
朴光駿（2012）. 仏陀の福祉思想—「仏教的」社会福祉の源流を求めて— 法藏館
松浦光和（2018）. 沖縄県の仏教寺院の活動状況—信者に対する精神的支援を中心にして— 宮城学院女子大学研究論文集 126, 39-49.
水野弘元（1972）. 仏教要語の基礎知識 株式会社春秋社 191-204.

The Activities of Buddhist Temples in Okinawa II: Overview of activities through the Noble Eightfold Path

MATSUURA Mitsukazu

This study surveyed the activities of five Buddhist temples in Okinawa Prefecture. In the survey, the author interviewed temples to learn about their activities. Then, the author organized the content of their activities according to the "The Noble Eightfold Path," which is deeply related to the Four Noble Truths, the fundamental doctrines of Buddhism. The Eight Proper Paths are eight categories of Buddhist practice methods. Specifically, they are:

- ① Right view
- ② Right intention
- ③ Right verbal action
- ④ Right physical action
- ⑤ The proper way of life
- ⑥ Right effort
- ⑦ Proper consciousness
- ⑧ Correct mental unification

As a result, it was found that the activities of the temples surveyed in this study were related to ① Right view, ② Right intention, and ⑥ Right effort, to the extent that was found through the interviews.